

文化

美術月評

10・11月

星 雅彦

宮城保武グラフィック・アート展

今世紀になって急速に発達したグラフィック・デザインの中に、グラフィック・アートがあるわけだが、それは線描を主体とした素描、版画、複製された印刷美術などを総括するので、広義になる傾向がある。それはかりか、塗り重ねたりするところの、絵画の中にも浸透してきている。というよりも、モダンアートがグラフィックの属性である。モダニズムのスタイルを、取り入れたのである。

運天一恵染色個展

専門の枠を越えた仕事というよりも、異なった視点から挑戦を試みているというべきか。染色でもって、純粹美術の表現を敢行して見せたのが、運天一恵のバネル張りの作品であった。サブ・二十字華

ユニークな視点の写真

宮城 保武 運天 一恵

染色で純粹芸術を表現

「紋と花」なびバネシリーズの一連の壁かけは、オリジナリティと伝統の結合が見られ、渋い味わいがある。一方、着尺や帯地などは、染色としての専門的な見解で問われる余地があるに相違ない。

「紋と花」なびバネシリーズの美術賞展に出品した作品である。白地に藍で染め抜いた基礎色に、図案化された文字の島詩、珊瑚礁、波、人魚に似た踊る女人像等が描かれ、中央に奥行きを持たせた「白い詩」は、半抽象表現でもって沖繩を対象化したイメージで捉えていた。

城間喜宏「古代幻想展」については、与儀達治の少年期から現在までの時間の流れと存在に対して、熱い視線を集めていたという心情的な、温情のこもった展覧があり、また大瀧雅博の詩的エキセントリックな想像力でもって、比喩的にマンダラの図形とオーバースペース、無量のきらめきとして作品を観察した展覧とがあって、これ以上筆者のつたない雑言は不要のように思う。

とにかく目を惹いたのは、バネル張りの五点の作品であり、その中では、「白い詩」と「化石の詩」が際立っていた。いずれも欧州美術クラブを通過して、キューバ展やスペイン

た作品の中に、象形文字に入った田圃の図形が、のめり込んだような埋没寸前の象嵌形態と、遠近法の浮遊感をもつ形態とを重ねた表現法を、取り入れたという点が、筆者には微妙な変化として受け取れたことを挙げておこう。また、コバルトブルーの色彩、それが白色に融解する色調の冴えは、いつもながら彼の独壇場であったという

こと。そうしておのずから筆者は、仲松清隆の透明なブルーを連想したが、その後の鏡長自修個展、南島の澄み切った空や海を詩情あふれる風景として、一色の変化の妙味を示したそのブルーが、折り重なったのであった。

更に、偶然ながら、田中初子水彩展を見るにつけ、4号大の32点の水彩画の抽象表現の、基礎色はブルーであり、新築作家協会に所属する具出身者の色感の共通性をそこに感じさせられたのである。この現象にこだわることはないが、あらためてコバルトブルーの魔的吸引力の強さを認識し、無視し得ない意味合いを感じたのだ。

田中初子の多様なフォルムの中では、のびのびとした自在なアクションペインティング風の手さばきの「はるかなる星」などが注目させるものがあり、幾何学的構図や、波状構図の単純化の中にも、スマートな作品があったこと、その健在ぶりを附記しておく。

なお新城剛は、80年からのアカマタシリーズを中心に、羽撃く第一回展をひらいた。一方、永津楨三は新作の小品展でそのひたむきな意欲を示した。

いずれも抽象表現での求心的姿勢をつが、新城が暗い土俗的な主題でもって、赤と黒を基調にそのコントラストを表出し、プリミティブな源流を求め、あらうほい表現をしているのに反し、永津は日本的な風土感を現代的なリズム感で捉え、魔的幻想性を打ち出し、またオブジェ作品では懐かしいポップアート風な枯木や毛皮やサンゴ石や鉄の部品などを若干の廃品を集めて配置し、彼らしく小定形のボックスに収め、在存を問い、ワビ・サビの精神の領域をかもし出していた。

そこには几帳面さと斬新さへの志向が明白であった。この対照的な二人の若い画家の抽象への指針が、幾つかの岐路をつくるような暗示的な二つの流れを意味しているようにも受け取れるのであった。(作家)